こんなんしてます。

わだいのしごと

122

求む人材

よそ者、ばか者、若者

日本の人口は、明治後期の1900年から100年かけて約3倍になり、2008年をピークに、さらに100年後には再び明治時代の人口まで下がると推計されています。同じ国土の広さで人口が1／3になるかもしれない兆候は、特に地方の空洞化として現れ、山村地域などでは若者がいなくなり後期高齢者ばかりに。村が消滅するのではとの危機に直面しています。

国や自治体の対策は、都市に集中する人口と経済の地方分散をめざし「若者を地方に呼び込むこと」。地方の活性化のために、都市と農村の交流が盛んに言われてきましたが、そのような段階はもはや過ぎ、もっと直裁に「地方に住み結婚をして子どもを産んでください」と言っているのです。

全国でまちづくりやむらづくりが盛んになった90年代の終わり頃から、活性化の先進地とされる地域には行政などからの視察バスが連なりました。当時、そうした先進地には必ず1人の立役者がいました。

農協や役場の職員、農家、旅館経営者などが「このままじゃいかん」と猛勉強し、取引先開拓に奔走し、時にはダマされたりしながらも売上げを伸ばしていく。古い体質の地域の中で「ばか者、変わり者」と呼ばれても泥臭く一途にがんばり地域を変えていく。こんなサクセスストーリーが本になり地域づくりのお手本になっていました。「がんばる人の力わざ」が成功を導いた時代でした。「よそ者、ばか者、若者」が地域づくりの3要素と言われてきました。外部の目で地域を見ることのできる「よそ者」、寝食を忘れるほどに一生懸命な「ばか者」、新鮮な感性と行動力のある「若者」です。

地域は若者を待っている…。

しかし、いつしか「ばか者」はあまり聞かなくなりました。否応なく進む地域衰退への対策には、1人のがんばりに頼るのではなく、長期的なビジョンに基づいた地域計画や他地域と差別化する高度なマーケティングが必要になってきたからです。

羽ばたきを応援する

地方に人の流れを加速しようという政策である「地域おこし協力隊」の増強が進められています。地方に移住して地域おこし支援や住民の生活支援を行うことが仕事で、都市部から住民票を移すことが条件です。過疎と超高齢化に悩む地域では「とにかく若者に来てもらいたい」と切望し、一方、地域に貢献したいと田舎志向の若者も増えています。しかし、地域づくりに理想と意欲が強いほど、現実の前に失望したり挫折する若者も多いようです。

ある地区で、20年前の小学校閉校が地域衰退への第一歩とするならば、そこには20年の衰退の坂道が存在します。坂道を転げた「地区の現在」は新たにやって来た若者にとって簡単に変革できない重い現実。坂の上の扉は1人のがんばりでは開けられないのです。

若者たちが大勢集まり活性化した有名事例もあります。それは町や村の生まれ変わりとも言える姿です。しかし、多くは自らの子も帰って来ない地域に住んで子を産めなどと無謀な期待をしているようで心配します。

よそ者、ばか者、若者の三重苦を、協力隊1人に背負わせてはいないでしょうか。

地域活性化という曖昧なものを若者に委ねる、かつてのような属人的な解決を期待するのではなく、むしろ私欲を捨て、わが村で経験を積んだら「よその土地でもいいから」と羽ばたきを見送ってやるような、そんな覚悟を持った受け入れ方が大事かもしれません。成長した若者は、広く国の宝に違いがないのですから。

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。